



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

北斎と幽霊

国枝史郎

初出：「サンデー毎日」

1925（大正 14）年 1 月 1 日号

北斎と幽霊

国枝史郎

—

文化年中のことであつた。

朝鮮の使節が来朝した。

いえなり おぼ
家 斉 將軍の 思 し召しによつて当代の名家に屏風を描かせ朝鮮王に贈ることになつた。

えどころ かとうゆうせん
柳 営 絵 所 預りは法眼 狩 野 融 川 であつたが、命に応じて屋敷に籠もり近江八

きごう
景を 揮 毫 した。大事の仕事であつたので、弟子達にも手伝わせず素描から設色まで融

ふる
川一人で腕を 揮 った。樹木家屋の遠近濃淡漁舟人馬の往来坐臥、皆狩野の規矩に

のつと
準 り、一点の非の打ち所もない。

「ああ我ながらよく出来た」

きんすなご ま つぶや
最後の 金 砂 子 を蒔きおえた時融川は思わず 呟 いたが、つまりそれほどその八
景は彼には満足に思われたのであつた。

はやしだいがくのかみ
老中若年寄りを初めとし 林 大 学 頭 など列座の上、下見の相談の催おされ

たのは年も押し詰まった師走^{しわす}のことであったが、矜持^{きんじ}することのすこぶる高くむし

ろ傲慢^{ごうまん}にさえ思われるほどの狩野融川はその席上で阿部豊後守^{あべぶんごのかみ}と争論をした。

「この八景が融川の作か。……見事ではあるが砂子が淡^{うす}いの」

——何気なく洩らした阿部豊後守のこの一言が争論の基で、一大悲劇が持ち上がったのである。

「ははあさようにお見えになりますかな」融川はどことなく苦^{にが}々しく、「しかしこの作は融川にとりまして上作のつもりにござります」

「だから見事だと申している。ただし少しく砂子が淡^{うす}い」

「決して淡くはござりませぬ」

「余の眼からは淡く見ゆるぞ」

「はばかりながらそのお言葉は素人評かと存ぜられまする」

融川は構わずこういい切り横を向いて笑ったものである。

「いかにも余は絵師ではない。しかしそもそも絵と申すものは、絵師が描いて絵師が観る、そういうものではないと思うぞ。絵は万人の観るべきものじゃ。万人の鑑識^{めがね}にかな
適^{かな}ってこそ天下の名画と申すことが出来る。——この八景砂子が淡い。持ち返って手
を入れたらどうじゃな」

満座の前で云い出した以上豊後守も引つ込むことは出来ない。是が非でも押し付けて一旦は自説を貫かねば老中の貫目^{かんめ}にも係わるというもの、もつとも先祖忠秋^{ただあき}以来ちと頑固に出来てもいたので、他人なら笑って済ますところも、肩肘張って押し通すという野暮な嫌^{きら}いもなくはなかつた。

狩野融川に至っては融通の利かぬ骨頂で、今も昔も変わりのない芸術家氣質^{かたぎ}という

やつであつた。これが同時代の文晁でもあつたら^{しやれ}洒落の一つも飛ばせて置いてサッ
サと屏風を引つ込ませ、気が向いたら砂子も蒔こう厭なら蒔いたような顔をして、数日
経つてから何食わぬ^{てい}態でまた持ち込むに違いない。いかに豊後守が頑固でも二度とは
決してケチもつけまい。

「おおこれでこそ立派な出来。名画でござる、名画でござる」などと褒めないものでも
ない。

「オホン」とそんな時は大いに気取つて^{から}空^{せき}の咳でも^せいて置いてさて引つ込むの
が策の上なるものだ。

その出来ない融川はいわゆる悲劇の主人公なのでもあろう。

持ち返つて手入れせよと、素人の豊後守から^{さしす}指図をされ融川は^{さつ}颯と顔色を変えた。

^せ急き立つ心を抑えようともせず、

「ご^{じょう}詮ではござれどさようなこと融川お断わり申し上げます！ もはや手前と致し
ましては加筆の必要認めませぬのみかかえつて蛇足と心得まする」

「えい^{うぬぼれ}自惚も大抵にせい！」豊後守は^{あざわら}嘲笑つた。「^{もろこしきそう}唐徽宗皇帝さえ苦
心して描いた牡丹の図を、名もない田舎の百姓によつて季節外れと嘲られたため描き改
めたと申すではないか。役目をもつて申し付ける。持ち返つて手入れ致せ！」

老中の役目を真つ向にかざし豊後守はキメ付けた。しかし^{かたく}頑なな芸術家はこうな
つてさえ折れようとはせず、蒼白の顔色に痙攣する唇、畳へ突いた手の爪でガリガリ畳
目を搔きながら、

「融川断じてお断わり。……融川断じてお断わり。……」

「老中の命にそむく気か！」

「身不肖^{ふしょう}ながら狩野宗家、もつたいたくも絵所預り、日本絵師の総巻軸、しかるにその作入れられずとあつては、家門の恥辱にござります！」

彼は俄然笑い出した。

「ワツハツハツハツこりや面白い！ 他人^{ひと}に勿ねられるまでもない。自身^{みずから}出品しないまでよ。……何を苦しんで何を描こうぞ。盲目千人^{めくら}の世の中に自身^{みずから}出品しないまでよ！」

融川はつと立ち上がったが見据えた眼で座中を睨む……と、スルスルと部屋を出た。一座寂然と声もない。

ひそかに唾を呑むばかりである。

その時日頃融川と親しい、林大学頭^{にじ}が膝行り出たが、

「豊後守様まで申し上げます」

「……………」

「狩野融川儀この数日来頭痛の気味にござりました」

「ほほうなるほど。……おおそうであつたか」

「本日の無礼も恐らくそのため。……なにとぞお許しくだされますよう」

「病氣とあれば是非もないのう」

——ちと云い過ぎたと思つていたやさきとりなす者が出て来たので早速豊後守は委せたのであつた。——

しかしそれは遅かつた。悲劇はその間に起こつたのである。

二

ちょうど同じ日のことであつた。

葛飾北斎は江戸の町を柱^{はしら} 暦^{ごよみ}を売り歩いていた。

北斎といえは一世の画家、その雄勁の線描写とその奇抜な取材とは、古今東西に比を見ずといわれ、ピカソ ^{あた} 辺りの表現派絵画と脈絡通ずるとまで持て ^{はや} 囃されているが、それは大正の今日のことで、北斎その人の生きていた時代——わけても彼の壮年時代は、^{みじめ} ひどく悲惨なものであった。第一が無名。第二が貧乏。第三が無愛想で人に憎まれた。彼の履歴を見ただけでも彼の不遇振りを知ることが出来よう。

「幕府用 ^{ようたしかがみし} 達鏡師の子。中島または木村を姓とし初め時太郎 ^{のち} 後鉄蔵と改め、春朗、群馬亭、菱川宗理、錦袋舎等の号あれども葛飾北斎最も現わる。彫刻を修めてついに成らず、ついで狩野融川につき狩野派を学びて奇才を愛せられまさに大いに用いられんとしたれど、不遜をもつて破門せらる。これより勝川春章に従い設色をもつて賞せられたれども師に対して礼を欠き、春章怒つて放逐す。以後全く師を取らず俵屋宗理の流風を慕いかたわら光琳の骨法を ^{たず} 尋ね、さらに雪舟、土佐に ^{さかのぼ} 遡り、^{みんな} 明人の画法を極むるに至れり」

云々というのが大体であるが、勝川春章に追われてから真のご難場 ^{なんば} が来たのであった。要するに師匠と離れると共に ^{こめびつ} 米櫃の方にも離れたのである。

彼はある時には役者絵を描きまたある時には ^{わらいえ} 笑絵をさえ描いた。頼まれては手拭いの模様さらに引き札の図案さえもした。それでも彼は食えなかつた。顔を隠して江戸市中を七色唐辛子を売り歩いたものだ。

「辛い辛い七色唐辛子！」

こう呼ばわつて売り歩いたのである。彼の眼からは涙がこぼれた。

「絵を断念して ^{かつしか} 葛飾へ帰り土を掘つて世を渡ろうかしら」——とうとうこんなことを思うようになった。

しわす おとず
やがて師走が音信れて来た。

暦が家々へ配られる頃になった。といや問屋へ頼んで安くおろして貰い、彼はそれを肩に担ぎ、

「暦々、初刷り暦！」

こう呼んで売り歩いた。

「暦を売って儲けた金でともかくも葛飾へ行つて見よう。名主の鹿野紋兵衛様は日頃から俺を可愛がってくださる。あのお方におすがりして田地を貸して頂こう。俺には小作が相応だ」

ひどく心細い心を抱いて、今日も深川の住居から神田の方までやって来たが、ふと気が付いてあたり四辺を見ると、鍛冶橋狩野家の門前である。

「南無三宝、これはたまらぬ」

あわてて彼は逃げかけた。しかし一方恋しさもあつて逃げ切つてしまうことも出来なかった。向かいの家の軒下へ人目立たぬように身をひそめ、冠った手拭いの結びを締め、ビューツと吹き来る師走の風に煽られて掛かる粉雪を、袖で打ち払い打ち払いじつと

す門内を隙かして見たが、松の前栽に隠されて玄関さえも見えなかった。

「別にご来客もないかして供待ちらしい人影もない。……お師匠様にはご在宅かそれとも御殿へお上がりか？ 久々で顔を拝したいが破門された身は訪ねもならぬ。……思えば俺もあの頃は毎日お邸へ参上し、親しくご薫陶を受けたものを思わぬことからご機嫌を損じ、宇都宮の旅宿から不意に追われたその時以来、幾年となくお眼にかからぬ。

さび身から出た錆でこのありさま。思えば恥ずかしいことではある」

述懐めいた心持ちで立ち去り難く佇んでいた。

寛政初めのことであつたが、日光廟修繕のため幕府の命を承わり狩野融川は北斎を連

れて日光さして発足した。途中泊まったのは^{つたや}蔦屋という狩野家の従来^の定宿であつた

が、余儀ない亭主の依頼によつて^{ほん}の席画の心持ちで融川は布へ筆を^{ふる}揮つた。

^{どうじさいし}童子採柿の図柄である。雄渾の筆法閑素の構図。意外に上出来なところから融川は得意で北斎にいった。

「中島、お前どう思うな？」

「はい」と云つたが北斎はちと腑に落ちぬ顔色であつた。「竿が長過ぎはしますまいか」

「何？」と融川は驚いて訊く。

「童子は爪立っておりませぬ。爪立ち採るよう致しました方が活動致そうかと存ぜられます」

^{はばか}「憚らず所信を述べたものである。

^{きんじ}矜持そのもののような融川が弟子に鼻柱を挫かれて^{かくど}嚇怒しない筈がない。

^{いら}彼は焦つてこう怒鳴つた。

「爪立ちするは大人の智慧じゃわい！ 何んの童子が爪立とうぞ！^{たわけもの}痴者めが！
愚か者めが！」

三

しかし北斎にはその言葉が頷き難く思われた。「爪立ち採るというようなことは童子といえども知つている筈だ」——こう思われてならなかつた。でいつまでも黙つていた。

^{しゅうね}この執念い沈黙が融川の心を破裂させ、破門の宣告を下させたのである。

「それもこれも昔のことだ」こう呟いて北斎は尚もじつと佇んでいたが、寒さは寒し人は怪しむ、意を決して歩き出した。

ものの三町と歩かぬうちに行く手から見覚えある駕籠が来た。

「あああれは狩野家の乗り物。今御殿からお帰りと見える。……どれ片寄って蔭ながら、様子をお伺がいすることにしよう」

——北斎は商家の板塀の蔭へ急いで体を隠したがそこから往来を眺めやった。

今日が今年の初雪で、小降りではあるが止む時なくさつきから ^{ひま} 隙 なく降り続いたた

めか、往来は ^{みち ほの} 灰 かに白み渡り、人足絶えて寂しかったが、その地上の雪を踏んでシトシトと駕籠がやって来た。

今北斎の前を通る。

と、タラタラと駕籠の底から、雪に ^{したた} 滴 るものがある。……北斎の见ている眼の前

で雪は ^{くれない} 紅 と一変した。

「あつ」

と叫んだ声より早く北斎は駕籠先へ飛んで行つたが、

「これ、駕籠止めい駕籠止めい！」

グイと棒鼻を突き返した。

「狼藉者！」

と駕籠 ^{わき} 側 にいた、二人の武士、狩野家の弟子は、刀の柄へ手を掛けて、^{さつ} 颯 と前へ躍り出した。

「何を ^{たわけ} 痴 ！ 迂濶者めが！ お師匠の一大事心付かぬか！ おろせおろせ！ えい戸を開けい」

北斎の声の凄じさ。氣勢に打たれて駕籠はおりる。冠った手拭いかなぐり捨て、ベツタリと雪へ膝を突き、グイと開けた駕籠の扉。プンと鼻を刺すは血の匂いだ。

「お師匠様。……」

と忍び音に、ズツと駕籠内へ顔を入れる。

融川は俯向き ^{うなだ}首垂れていた。膝からかけて駕籠一面飛び散った血で ^{こうはんはん}紅斑々、

^{いき}呼吸を刻む肩の揺れ、腹は ^{たた}たた今切つたと見える。

「無念」

と融川は首を上げた。下唇に鮮やかに五枚の歯形が着いている。喰いしばった歯の跡である。……額にかかる鬢の乱れ。顔は ^{あい}藍より蒼白である。

「そ、そち誰だ？ そち誰だ？」

「は、中島めにござります。は、鉄蔵めにござります……」

「無念であつたぞ！ ……おのれ豊後！」

「お氣を確かに！ お氣を確かに！」

「……一身の面目、家門の誉れ、腹切つて取り止めたわ！ ……いずれの世、いかなる代にも、認められぬは名匠の苦心じゃ！」

「ごもつともにござります。ごもつともにござります！」

「ここはどこじゃ？ ここはどこじゃ？」

「お屋敷近くの往来中……薬召しましょう。お手当てなさりませ」

「無念！」

と融川はまた呻いた。

「駕籠やれ！」

と云いながらガツクリとなる。

はつと気が付いた北斎は駕籠の戸を立てて飛び上がった。それから静かにこう云つた。

「狩野法眼様ご病氣でござる。駕籠ゆるゆるとおやりなされ」

変死とあつては後がむつかしい。病氣の ^{てい}態にしたのである。

ちらほらと立つ人影を、先に立つて追いながら、北斎は悠々と歩いて行く。

この時ばかりは彼の姿もみすばらしいものには見えなかった。

その夜とうとう融川は死んだ。

この^{しらせ}報知を耳にした時、豊後守の驚愕は^{よそ}他の見る眼も気の毒なほどで、^{おうおう}快々

として楽しまず自然^{つとめ}勤務も^{おこた}怠りがちとなった。

これに反して北斎は一時に^{こころ}精神が^{ひきし}緊張まった。

「やはり師匠は偉かった。威武にも屈せず権力にも恐れず、堂々と所信を披瀝したあげ

く、身を殺して^{かえりみ}顧なかつたのは大丈夫でなければ出来ない^{しわざ}所業だ。……これに

比べては貧乏などは物の数にも入りはしない。^{おぎゅうそらい}荻生徂徠は^{いりまめ}炒豆を齧って古人
を談じたというではないか。豆腐の殻を食ったところで生きようと思えば生きられる。
……葛飾へ帰るのは止めにしよう。やはり江戸に止どまって絵筆を握ることにしよう」
——大勇猛心を揮い起こしたのであつた。

四

こういうことがあつてからほとんど半歳の日が経つた。依然として北斎は貧乏であつた。

ある日大店の番頭らしい立派な人物が訪ねて来た。

主人の子供の節句に飾る、^{のぼ}幟り絵を頼みに来たのである。

「他に立派な絵師もあろうにこんな^{わし}俺のような^{やくざもの}無能者に何でお頼みなさるのじゃな？」

例の無愛相な物云い方で北斎は不思議そうにまず訊ねた。

「はい、そのことですが、私^{ところ}所の主人と申すは、^{あきゅうど}商人に似合わぬ風

流人で、日頃から書画を好みますところから、文晁先生にも^{ひいき}ご贔屓になり、その方面

のお話なども様々承わっておりましたそうで、今回節句の五月^{さつきのぼ}幟^{ぼし}りにつき先生にご意見を承わりましたところ、当今浮世絵の名人と云えば北斎先生であろうとのお言葉。主人大変喜ばれまして早速私にまかり越して是非ともご依頼致せよとのこと、さてこそ本日取急ぎ参りました次第でございます」

「それでは文晁先生が^{わし}俺^{わし}を推薦くださったので？」

「はいさようにございます」

「むう」

とにわかに北斎は腕を組んで唸り出した。

当時における谷文晁は、田安中納言家のお抱え絵師で、その生活は小大名を凌ぎ、まことに素晴らしいものであった。その屋敷を^{しゃざんろう}写山楼^{しゃざんろう}と名付け、そこへ集まる人達

はいわゆる一流の^{しんしん}縉紳^{しんしん}ばかりで、浮世絵師などはお百度を踏んでも対面することは

むずか^{むずか}困難^{むずか}しかった。——その文晁が意外も意外自分を褒めたというのだからいかに^{ころう}固陋^{ころう}

の北斎といえども感激せざるを得なかった。

「よろしゅうござる」

と北斎は、喜色を現わして云ったものである。

「思うさま腕を揮いましょう。承知しました、きつと描きましょう」

「これはこれは早速のご^{しょういん}承^{しょういん}引^{しょういん}、主人どれほどにか喜びましょう」

こういつて^{つかい}使^{つかい}者^{つかい}は辞し去った。

北斎はその日から客を辞し家に籠もって外出せず、画材の工夫に^{しん}神^{しん}を凝らした。

——あまりに固くなり過ぎたからか、いつもは湧き出る空想が今度に限って湧いて来ない。

思いあぐんである日のこと、日頃信心する柳^{やなぎ}島^{しま}の妙見堂へ参詣した。その

かえりみち
帰路のことであつたがにわかに夕立ちに襲われた。雷嫌いの北斎は青くなって狼狽し、田圃道を一散に飛んだ。

その時眼前の榎^{えのき}の木へ火柱がヌツと立つたかと思うと四方一面深紅となつた。耳

ろう
を聳る落雷の音！ 彼はうんと気絶したがその瞬間に一個の神将、かしら
頭は高く
雲に聳え足はしっかりと土を踏み数十丈の高さに現われたが——莊嚴そのもののような
姿であつた。

近所の農夫に助けられ、駕籠に身を乗せて家へ帰るや、彼は即座に絹に向かった。筆
か
を呵して描き上げたのは燃え立つばかりの鍾馗^{しょうき}である。前人未発の赤鍾馗。紅一
色の鍾馗であつた。

これが江戸中の評判となり彼は一朝にして有名となつた。彼は初めて自信を得た。
続々名作を発表した。「富士百景」「狐の嫁入り」「百人一首絵物語」「北斎漫画」
「朝鮮征伐」「庭訓往来」「北斎画譜」——いずれも充分芸術的でそうして非常に独創
的であつた。

彼は有名にはなつたけれど決して金持ちにはなれなかつた。かしよく
貨殖^{うと}の道に疎か
たからで。

彼は度々住家^{いえ}を変えた。彼の移転性は名高いもので一生の間に江戸市中だけで、八十
回以上百回近くも転宅^{ひっこし}をしたということである。越して行く家越して行く家いずれ
も穢ないので有名であつた。ひとは物臭い性質から、ひとはもちろん家賃の点から、
貧家を選まざるを得なかつたのである。

それは根岸御行^{おぎよう}の松に住んでいた頃の物語であるが、ある日立派な侍が沢山の進

物を供に持たせ北斎の 陋^{ろう} 屋^{おく}を訪ずれた。

「主人阿部豊後守儀、先生のご高名を承わり、入念の直筆頂戴いたしたく、^{むね}旨^{めい}を奉じてそれがし事本日参上致しましてござる。この儀ご承引くだされましょうや？」

これが使者の口上であつた。

阿部豊後守の名を聞くと、北斎の顔色はにわかに変わった。物も云わず腕を組み冷然と侍を見詰めたものである。

ややあつて北斎はこう云つた。

「どのような絵をご所望かな？」

「その点は先生のお心次第にお任せせよとのご諒にござります」

「さようか」

と北斎はそれを聞くと不意に凄く笑つたが、

「心得ました。描きましょう」

「おおそれではご承引か」

「いかにも入念に描きましょう。阿部様といえは譜代の名門。かつはお上のご老中。さようなお方にご依頼受けるは絵師冥利にござります。^{あつ}とばかりに驚かれるような珍しいものを描きましょう。フフフ承知でござるよ」

五

その日以来門を閉じ、一切来客を謝絶して北斎は仕事に取りかかった。弟子はもちろん家人といえども画室へ入ることを許さなかつた。

彼の意気込みは物凄く、態度は全然^{きちがい}狂^{きやう}人^{にん}のようであつた。……こうして実に二十日間というものの画面の前へ坐り詰めていた。何をいつたい描いているであろう？ それは誰にも解らなかつた。とにかく彼はその絵を描くに^{りんぼん}臨^{りん}本^{ぼん}というものを^{りんぼん}用^{よう}い^いなかつた。今日のいわゆるモデルなるものを用いようとはしなかつた。彼はそれを想像によつ

て——あるいはむしろ追憶によつて、描いているように思われた。

こうして彼は二十日目にととうその絵を描き上げた。

彼は深い溜息をした。そうしてじつと画面を見た。彼の顔には疲労があつた。疲労

れたその顔を歪めながら会心の^{えみ}笑を洩らした時には、かえつて寂しく悲しげに見えた。

クルクルと絵絹を巻き納めると用意して置いた白木の箱へ、静かに入れて封をした。

どうやら安心したらしい。

翌日阿部家から使者が来た。

「このまま殿様へお上げくだされ」

北斎は云い云い白木の箱を使者の前へ差し出した。

「かしこまりました」

と一礼して、使者はすぐに引き返して行つた。

ここで物語は阿部家へ移る。

阿部家の夜は更けていた。

豊後守は居間にいた。たつた今柳營のお勤め先から自宅へ帰つたところであつてまだ装束を脱ぎもしない。

「北斎の絵が描けて参つたと？　それは大変速かつたの」

豊後守は満足そうに、こう云いながら手を延ばし、使者に立つた侍臣金弥から、白木の箱を受け取つた。

「どれ早速一見しようか。それにしても剛情をもつて世に響いた北斎が、よくこう手早く描いてくれたものじゃ。使者の口上がよかつたからであらうよ。ハハハハハ」

とご機嫌がよい。

まず箱の紐を解いた。つづいて封じ目を指で切つた。それからポンと^{ふた}蓋をあけた。
絵絹が巻かれてはいつている。

^{あかり}
「金弥、燈火を掻き立てい。……さて何を描いてくれたかな」

呟きながら絵絹を取り出し膝の前へそつと置いた。

「金弥、抑えい」

と命じて置いて、スルスルと絵絹を延べて来たが、延べ終えてじつと眼を付けた。

「これは何んだ？」

「あつ。幽霊！」

豊後守と金弥の声とがこう同時に筒抜けた。

「おのれ融川！」

と次の瞬間に、豊後守の叫び立てる声が、深夜の屋敷を驚かせたが、つづいて「む
う」^{うな}という唸り声、……どんと物の仆れる音。……豊後守は気絶したらしい。

幽霊といえば応挙を想い、応挙といえば幽霊を想う。それほど応挙の幽霊は有名なものになっているが、しかし北斎が思うところあつて豊後守へ描いて送った「駕籠幽霊」という妖怪画はかなり有名なものである。

はくがいがい
白 皚々たる雪の夕暮れ。一丁の駕籠が捨てられてある。駕籠の中には老人がい
る。露出した^{はらわた}腸。飛び散っている血汐。怨みに燃えている老人の眼！ それは人
間の幽霊でありまた幽霊の人間である。そうしてそれは狩野融川である。

「そうです私は商売道具で、つまり絵の具と筆と紙とで、師匠の仇を討とうとしました。豊後守様が剛愎でも、あの絵を一眼ごらんになったら気を失うに相違ないと、こう思つてあの絵を描いたのでした。

私の考えはあたりました。^{おもわく}思惑以上に当たりました。あれから間もなく豊後守様はお役をお退きになられたのですからね。

私は溜飲を下げましたよ。そうして私は自分の腕を益々信じるようになりましたよ。

しかし私は二度と再び幽霊の絵は描きません。なぜ^{なぜ}何故とおっしゃるのでございますか？

わけ
理由はまことに簡単です、たとえこの後描いたところで到底あのような力強い絵は二度

と出来ないと思うからです」

これは後年ある人に向かって北斎の洩らした述懐である。

底本：「怪しの館 短編」国枝史郎伝奇文庫 28、講談社

1976（昭和 51）年 11 月 12 日第 1 刷発行

初出：「サンデー毎日」

1925（大正 14）年 1 月 1 日号

入力：阿和泉拓

校正：多羅尾伴内

2004 年 11 月 24 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/](http://www.aozora.gr.jp/)）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。